
ゲーラ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲラ

【Nコード】

N3108F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

イスラム教が興って間も無くのバグダート。そこで女遊びの好きな男が突然消えて。謎と恐怖が深まり遂には。アラブを舞台にして書いてみました。

第一章

ゲーラ

イスラム教が興つて少し経つた頃。バグダートの話である。

この街は空前の反映を迎えようとしていた。ムハンマドの後継者達の後ウマイヤ朝からアッバース朝になった。その王朝の首都として人が急に集まりそこに商業が栄えようとしていたのだ。

ここにマムーという商人がいた。歳は五十程で濃い髭を持っている。端整だが何処かしまりのない顔をしていた。

顔にしまりが無いのには理由があつた。彼は名うての女好きだつたのだ。その時の稼ぎは殆どを女に使う。妻子もいなく気楽に女遊びを楽しむ毎日だつた。

「このバグダートも可愛い娘が増えたよな」

彼は昼蜂蜜をたっぷりかけた三角のドーナツをかじりながら仲間に話していた。

「最近あちこちから人が集まっているからな」

商売仲間であるスレイマーンはそれに応えた。彼はナツメヤシを食べていた。店は繁盛してかなり人が多かつた。アラビア語だけでなく中国語や他の国の言葉も飛び交っている。

「そつちの商売はかなり儲かつてるそうだが」

「そうだろうな」

「この前の娘はどうだつた？」

スレイマーンは尋ねてきた。

「あの中国の娘かい？」

「そう、あの黒髪の女の子」

彼は言った。

「目が切れ長でやけに艶やかだつたけれど」

「ああ、よかつたよ」

マムーは助平そうに笑つてそう述べた。

「肌がな」

「ああ」

彼はその少女について話しはじめた。

「白いだろ」

「俺達よりはな」

「ただ白いだけじゃないんだ」

「というと？」

「肌触りがいい」

「そんなにか」

「ああ。ほら、青い目や緑の目の女の子がいるだろ」

「いるな、最近」

ヨーロッパから流れてきた少女達である。この時代奴隷の売買は普通だった。ヨーロッパからもそうした奴隷が辿り着いていたのだ。彼女達が娼婦になることも普通であったのだ。

「肌はあの娘達の方が白い。これは事実だ」

「それでも肌触りが違うのか」

「全然違う」

マムーはきつぱりと述べた。

「あの娘達はザラザラしているんだ」

「そうなのか」

「そうなのかってあっちの女の子は抱いたことがないのか？」

「俺はそういう遊びはしないんだ」

スレイマーンは答えた。

「もう嫁さんが二人いるからな。満足している」

「二人だけでか」

「二人もいれば充分だろ」

スレイマーンはそう考えていた。

「まあ御前は違うみたいだけれどな」

「男の価値は何人の女を抱いたかで決まるんだよ」

今でもある考えである。

「だから俺はな」
「それであの中国の娘も抱いたのか」
「ああ、それでだ」
話が戻った。
「その肌触りだよ」
「そんなにいいのか」
「細やかでな。吸い付いてくるようだった」
「ふん」
「それが忘れられないな。今日も稼ぎがいいから」
「その娘のところに行くのか？」
「いや、あの娘はもういい」
「だがママーはそれは否定した。」
「別の娘を抱くさ、今日は」
「また中国の娘を見つけてか」
「中国の娘じゃなくてもいいな」
彼は考えてからこう述べた。
「一つの国の女だけを相手にするなんて下らないことだ」
「バグダートにいるからかい？」
「そうさ、折角色々な人間が集まってきているんだ」
彼は言う。
「いるだけの女を抱かなくちゃ意味がないだろう？」
「よく身体がもつな」
「その為に生きているからな」
「そういうことか」
「そういうことさ。まあこのまま稼ぎがよかつたらな」
「ああ」
「今日もまただ」
「まあ楽しんできな」
スレイマーンはそう声を送った。
「身体を壊さない程度にな」

「それで死んでもそれはそれで本望さ」

ドーナツを食べて顔を崩して笑った。

「女で死ぬなんていいものじゃないか」

「そんなものかね」

「俺はそうさ。じゃあ行くか」

「ああ。親父、金はここに置いておくからな」

「毎度」

金を置いて店を出た。そして二人は市場で商いに戻るのであった。バグダートの日差しは暑いが夜はそうではない。涼しげな風が一陣吹く。星月夜の中をマムーとスレイマーンが歩いていった。

「それでだ」

スレイマーンはその中でマムーに声をかけてきた。

「どの娘にするんだい？」

「まずは遊郭のところに行こう」

「ああ」

二人はまずはそうした酒場に入った。イスラムでも酒は何だかんだで飲まれていた。それは今でも時折見られる。過度の飲酒は駄目だが少しならアツラーも許してくれるという理由である。

ワインを飲みながら女の子を物色する。マムーはその中で一人の少女を見た。黒い目で切れ長の目を持つ少女だ。肌を露わにした薄いアラビアの服を着ているがその雰囲気は完全に異国のものであった。

「彼女だったな」

「昨日の娘はな」

マムーは答えた。

「よかった」

「しかし今日は別の娘か」

「ああ、誰にするかな」

「あの娘はどうだい？」

スレイマーンは黒人で目の大きな娘を指差した。

「あの娘は一週間前に抱いた」
「そうか」
「マムーの返事に頷く。」
「黒人の女の子もいいものだ」
「彼は女の子に関する蘊蓄をはじめた。」
「いいのか？」
「筋肉があつてな。それがいいんだ」
「ふうん」
「特にあの娘はな」
「その少女を見やつて言う。」
「じゃあ今夜はあの娘かい？」
「いや、今夜は止めておくよ」
「そうかい」
「今夜はもつと色気のある娘がいいな」
「あの娘はどうだい？」
「スレイマーンはアラビア人の娘を指差して問うた。」
「色気が凄いぜ」
「あの娘は一月前に抱いた」
「早いな」
「その前にもな、今日はいいさ」
「じゃあ誰にするんだよ」
「何か誰もいないような気がしてきてそれに問う。」
「このままじゃ誰もいないぞ」
「それなんだよ」
「マムーは困った顔で述べた。」

第二章

「この店の娘はあらかた味わって。今日は違う娘がな」

「じゃあ店を変えるかい？」

「そうだな。店はここだけじゃない」

バグダートは大きな街だ。こうした店が他に幾らでもある。スレイマーンですら知らないような店すらある。奥の深い街なのである。

「出るか」

「ああ」

こうして場所を変えることにした。店を出て夜道を歩いていた。

「さて、と。何処にするんだい？」

「そうだな。あの店にするか」

目の前にある一軒を指差した。

「あそこにも可愛い娘がいるんだ」

「じゃあそこにするか」

「ああ、そうするか」

こうしてその店に向かおうとした。だがここでマムーは足を止めた。

「おや」

「どうした？」

「いや、あの娘」

その時目の前から一人の娘がやって来た。華奢で小柄な身体に白い肌が月明かりの中に浮かんでいる。髪は黒くそれが白い月の光を照らし出していた。琥珀色の目が切れ長に妖艶さを放っていた。

「これはまた」

スレイマーンも彼女を見て声をあげた。

「凄い美人だな」

「ああ、そうだな」

それにマムーも頷く。

「バグダート広と言えどあそこまでの娘は見たことがない」

「君が言うんだから相当なものだな」

「そうだ。これは」

「今夜はあの娘にするのかい？」

「決めた」

その言葉に頷く。

「今夜はあの娘だ」

「わかった。じゃあ後は話だな」

「君はいいんだな」

「だったらさっきの店でもう決めているさ」

笑ってそう述べた。

「生憎だが酒だけでいいんだ」

「まあ酒もな。いいものだけれど」

「アツラーよ、お許しあれ」

右目を瞑って言った。こう言うってから飲めばいいとされているのである。それがムスリムの教えであった。酒を飲む前にアツラーに許しを乞えばよい。案外フランクなどころがあるのだ。

「女の子にはそんなの言わなくていいぞ」

「公平に愛する限りはかい」

「俺は博愛主義者だからな」

笑いながら言った。

「だから今から」

「公平に愛しに行く」と

「そうだ。じゃあな」

そう言ってスレイマーンと別れた。

「明日色々話すから」

「ああ、楽しみにしているよ」

いつものことであった。マムーは女の子との一夜を詳しくスレイマーンに話すのである。彼にとってはシャーナーメに匹敵する英雄譚なのだ。スレイマーンにとっては都々逸であっても。

マムーはすぐその娘に声をかけて夜の街に姿を消した。スレイマーンはそれを見送り一旦は別れた。そして次の日であった。

店に出て来たマムーは上機嫌であった。そして昨夜のことを彼に話す。

「いやあ、昨日はよかった」

いつもここからはじまるのである。

「まずはな、二人で」

「うん」

「酒を楽しみながら話をした。その話の面白いこと」

「そんなに面白かったのか」

「カリフが街で商人に化けて何かとしているとか色々あったぞ」

「カリフがねえ」

ハールーン「アル」ラシードだ。いつも伊達男の宰相と首切り役人の黒人を従えている。生真面目だが結構物騒なカリフというのが印象だ。何しろすぐに死刑を宣告するのだ。

「そう、そのカリフの話や異国の話。実によかった」

「そしてそれからも」

「ベッドの中は言うまでもない」

「ほう」

「堪能させてもらった。やはり寝るのなら女の横だよ」

「そうだな。若ければ」

「何か若さをもらった気分だよ、全く」

「そうなのか？」

だがスレイマーンはそれには違和感を覚えた。

「あまりそうは見えないが」

「どうしたんだい、一体」

「いや、今の君の姿だけけどね」

「ああ」

「徹夜だったのかい？」

「まあそうだけれど」

「それでか。随分やつれている」

「だが全然疲れていないんだ」

「マムーのテンションはかなり高かった。いつも精力的な彼だが今日は特にそうだった。」

「何か無性に力が出て仕方ない」

「そうなのかい？」

「そうさ。何を言っているんだ」

「いや、それならいいが」

それでもどうにも引つ掛かるものを感じずにはいられなかった。

それだけ今のマムーのやつれは異様であった。まるで三日も眠っていないかの様に。

「今夜もあの娘にするよ」

「今夜もかい？」

「ああ、何しろ最高だからな。何もかもが」

「そうかい。じゃあ今日も稼ごう」

「ああ、今日はどんどん稼ぐぞ」

イスラム商人らしい言葉であった。イスラムは商人の宗教であり商業を奨励していた。だからこそ瞬く間に普及したのである。武力で広まっただけではないのだ。

「それで今夜も」

「無理はしないようにな」

「何、大丈夫だよ」

くままである目で答えた。

「夜の為ならな」

「そうか？」

「そうさ、じゃあやるうぜ」

「ああ」

スレイマーンも自分の店に入った。それから商いに励んだがマムーの様子は明らかにおかしかった。ずっと高いテンションのままものを売っていた。かなり稼いでいるがそれを何に使うかはわかって

いた。夕刻になり商売が終わった頃になって彼はマムーに声をかけた。

第三章

「また行くのかい？」

「ああ、店も聞いたしな」

「どの店なんだい？」

「今から行くよ。一緒にどうだい？」

「そうだな」

ふと興味が沸いた。その酒を飲んでみるのも悪くないと思ったのだ。

「じゃあ案内してくれ」

「女の子はいいかい？」

「ああ、いつも通りさ」

彼は返した。

「あの娘とな」

「今日もか」

「もう他の娘はいい」

こつも述べた。

「彼女さえいれば」

「わかった。じゃあそうしな」

スレイマーンとしてもここまで思い入れているのならもう無理は言わなかった。

「ただな」

「何だ？」

「あまり無理はするなよ」

「何、大丈夫だ」

そうは答えても顔色は悪いままであった。

「この程度じゃな」

「そうか。じゃあな」

「また酒かい？」

「今日は少しだけれどな」

「まあそつちもまた今度な」

「またな」

「ああ」

こうしてマムーはまた夜の街に消えていった。それが終わった翌朝、彼はさらにやつれた姿になってしまっていた。

「……おい」

「いやあ、昨日もよかったよ」

二日遊んだだけとはとても思えなかった。こけた頬にくまがはつきりと浮かんだ目。それでいてその目は赤く血走っている。まるで幽鬼のようであった。

「一晩中さ」

「本当に一晩かい？」

「何を言っているんだよ」

マムーは友の言葉に眉を顰めさせた。

「一晩じゃないか。わかってると思うが」

「いや、何か」

マムーのやつれようはとてもそうは見えなかったからだ。まるで暫く飲まず食わずで苦しんだかの様な顔になってしまっていたからだ。

「なあ」

そのうえで友に言った。

「今日は休んだらどうだ？」

「夜をかい？」

「それだけじゃない、店もだ」

見るに見かねて忠告した。

「このままじゃ本当に死ぬぞ」

「何言っているんだ、働かないと生きていけないだろ」

マムーはそう反論した。

「それに夜だつて」

「それだけは止めておけ」

スレイマーンは真剣にそれを制止した。

「御前このままだと本当に死ぬぞ」

「二日遊んだだけで何を言っているんだ」

「鏡見たのか!？」

いい加減らちがあかないのでそう言った。

「自分の顔を見てみる」

「鏡ですか」

「そうだ、それからよく考えるんだ。今御前が何をしているのかわかな」

彼は言う。

「わかったな、それで」

「全く。心配性だな」

マムーは何故友人がそこまで言うのかわからなかった。自分では何も無いのだ。

「俺はこの通りピンピンしているぞ。何を怖がっているんだ」

「鏡はいいのか」

「ああ、いいよ」

この時鏡を見ていれば運命は変わったかも知れない。だが彼はそれすらも断った。それで彼の運命は決まってしまったようなものであった。

「別にさ」

「それで今日もか」

「ああ、バグダートのムスリムの生活さ」

マムーは言う。

「昼は必死に働き、夜は豪勢に遊ぶ」

スレイマーンはそれを聞いてもう言っても無駄かと思った。頷くだけになっていた。

「わかった。じゃあそうしな」

「そうさせてもらうぜ。また夜な」

「ああ」

それでこの日は終わりだった。スレイマーンはその日の夜は遊びに出ずに家でゆっくりと休んだ。次の日の朝に異変が起こったのであった。

店がある市場に行く。店の者達が何かと騒いでいたのだ。

「何があつたんだい？」

「あつ、これは旦那様」

雇われている若い男達が主人の顔を見てほっと安堵した顔になつた。

「いいところに来られました」

「いいところ？」

「はい、実はこいつ等が色々聞いてくるんですよ」

「旦那様は何処かつて」

「旦那様!？」

その言葉にいぶかりながら使用人達の指差す方に顔を向けた。するとそこにいたのはどれも見知った顔ばかりであった。

「君達は」

「どうも」

「お騒がせしました」

彼等は申し訳なさそうに頭を下げる。見ればマムーの店の者達であった。

「どうしたんだい、旦那様がどうか」

「いえ、実は」

「うちの旦那様のことなんですけれど」

「うん」

「ここは彼等の話を聞くことにした。

「昨日から戻られないんですよ」

「昨日からか」

「お家にもおられませんしここにも。若しかしたらと思ってここに来たんですが」

「いないみたいです」

「そうだな、僕は見えていない」

スレイマーンはそれに答えた。

第四章

「しかし」

「しかし!？」

「何か知ってるんですか!？」

「マムーの使用人達はスレイマーンの言葉に顔を向けてきた。首が
一気に伸びた。」

「心当たりはある」

「それは一体」

「夜だ」

「夜、ですか」

「そうだ。まずは夜になってからだ」

「はあ」

「それでいいな」

「夜になれば旦那様の行方がわかるんですね」

「僕の考えが正しければな。それでもだ」

「それでも?」

「正直生きているかどうかは保障できないぞ」

「それはまあ」

「少しは覚悟しています」

「彼等は肩を小さくしてそう述べた。」

「けれどそれでもお願いします」

「やっぱり。どうなっているかがまず知りたいですから」

「そうだな」

「スレイマーンもそれに頷いた。」

「では夜な」

「はい」

「ではその時また来ますんで」

「わかった。その時だが」

ここでふと自分の店の中を見た。そして自分の使用人達の中でとりわけ精悍で凛々しい男に声をかけた。

「ジンナ」

「はい」

ジンナと呼ばれたその若い男はそれに応えた。

「何でしょうか」

「今夜も御前の力を借りたいがいいか」

「私の力をですか」

「そうだ。一応これを持っていけ」

そう言うと店の柱にかけている一本の刀を取ってジンナに手渡した。

「これをな」

「これをですか」

「ただしな、斬るのは一回にしておけ」

「一回ですか？」

「そうだ、一回だ」

スレイマーンは言う。

「一回だけだぞ、いいな」

「何故ですか？」

「その時になればわかる」

彼は念を押す。

「いいな、それだけでいいんだ。一回だけで」

「わかりました。じゃあ」

「それは背中にも隠しておけ」

「ええ」

「僕の予想が正しければだ。間違っていることをアツラーに願う」

「アツラーに」

「そう、アツラーにだ。わかったな」

「わかりました。ではアツラーフアクバル」

「アツラーフアクバル」

最後にアツラーに祈った。そして夜になりジンナを街に出した。その時ある女のことをくどいまでに言い含めた。

「覚えたな」

「はい、小柄で華奢な女ですね」

「肌は白く、髪と目は黒だ」

「中国人ですか？」

「そこまではわからない。だが妖しい女なのは確かだ」

「その女と会ってからは」

「まずはついて行け。そして」

「そして？」

「何かあればその刀で斬れ」

「一回だけです」

「そうだ、絶対に二度は駄目だ。二度斬ると御前が死ぬことになる。いいな」

「わかりました。では」

「よし、行け」

ジンナを送り出した。

「後から私が見ているからな」

「私共も」

「ジンナさん、頑張ってくださいよ」

「何か大事になってるなあ」

マムーの店の者達も来ていた。そんな様子を見てジンナは思わず呟いたのであった。

だがそれさえもスレイマーンにとっては咎める対象になった。

「何を言っている」

彼は言う。

「人が一人いなくなっているのだぞ」

「それはわかっていますけど」

ジンナはつきりマムーが女遊びにうつつを抜かしているのだからと思っていたのだ。バグダートの様な街では退廃の中に身を沈め

る者も多いのだ。

「まさかねえ」

「とにかく行け」

今度は急かした。

「そんなことを言っている間に来たみただぞ。ではな」

スレイマーンはマムーの店の者達と共に身を隠した。そして道に出ているのはジンナだけとなってしまったのであった。

「ちえっ、旦那様も最後まで言ってくれればいいのに」

何故一回だけしか斬ってはいけないのか、それがまず気になった。だがあれこれ考えている間に女が彼の側にまでやって来ていた。

見れば本当に美しい女であった。華奢な身体が余計に妖しい色気を振りまいていた。まるで夜に咲く紅の花のように。黒い髪と目が妖艶な輝きを闇夜の中に見せていた。白い肌が月明かりの中に輝いている。一目で心を奪われるような女であった。

「もし」

その女が笛の音に似た美しい声でジンナに語り掛けてきた。

「はい」

ジンナはそれに応えた。スレイマーンの店では堅物として知られている彼もその声にすっかり参りそうになってしまっていた。だが何とか踏み止まっていた。

「今はお一人でしょうか」

「そうならばどうされるのですか？」

「よければご一緒しませんか」

ジンナの目を流し目で見てきて問うてきた。

「一晚」

「一晚ですか」

「ええ」

女は答えた。

「お安くしておきますよ」

その言葉から女が娼婦であるとわかる。だがそんなことは大した

違いではなかった。

「わかりました」

主に言われたからであるがこれは心からの言葉でもあった。

第五章

「では宜しいでしょうか」

「ええ、では」

そつと彼の手を握ってきた。そして囁いてきた。

「いらして下さい」

「わかりました」

そのままジンナは女と共に歩いていく。遠くになったところで覗いていたスレイマーンは述べた。

「よし、いい頃合いだ」

「いいのですか」

「そうだ、全ては上手くいっている」

彼は言った。

「後はあいつ次第だな」

「ジンナさん次第ですか」

「何かあるんですね」

「あるからあいつに頼んだんだ」

スレイマーンは一緒にいるマムーの店の者達に顔を向けて言った。

「あいつならやってくれるだろうからな」

「まあジンナさんしっかりしていますからね」

それは彼等も知っていた。

「腕っぷしも強いですし」

「だからだ。では追うぞ」

「はい」

「それじゃあ」

マムーの店の者達もスレイマーンについて行く。隠れてジンナと女を尾行していく。その中でマムーの店の者の一人がスレイマーンに問うた。

「ところでスレイマーンさん」

「何だ？」

「旦那様はどうなったんでしょっかね」

「それもすぐにわかる」

彼はそう返した。

「すぐにですか」

「そうだ、ただしな」

「ええ」

「どうなっているても。驚くなよ」

「どうなっているてもってまさか」

「そのまさかだ」

他の者にも述べた。

「覚悟はしておけ。僕の予想が合っていればな」

「何か嫌な気分になってきましたよ」

「安心しろ、もうすぐそんな気分もなくなる」

「どうしてですか？」

「悠長な話じゃなくなってるからだ」

「何かどんどん不安になるんですけれど。そんなこと言われたら」

「そうですよ、本当に何があるのか」

「とりあえず驚くようなことはないようにな」

スレイマーンは彼等にそう言い含めた。

「それはいいな」

「はあ」

「じゃあまあ腹はくくります」

「そうだ、腹だけはくくっておいてくれ」

また言い含める。

「何があってもな」

「わかりましたよ」

「アッラーよ。御加護を」

「アッラーよ、護り給え」

スレイマーンもまたアッラーの名を口にしていた。半ば無意識に。

「そして悪しき物に裁きを」

そう言ってさらに尾行していく。二人はやがて夜の街の端にある

一軒家へと入って行った。

「あれっ、ここって」

マムーの店の者のうちの一人がその一軒家を見て声をあげた。

「どうしたんだ？」

「いえね、ここですけど」

彼は言う。

「前を通り掛かったことがあるんですけど空き家だったんですよ」

「空き家が」

「はい」

そして答えた。

「おかしいですね。いや、ここで逢引なのかな」

「そうか、空き家が」

それを聞いたスレイマーンの目が剣呑なものを見るものになって
いた。

「やはりジンナを呼んだのは正解だったかもな」

「そうなんですか」

「僕の予想通りならな」

彼はその空き家の筈の家を見ていた。

「いいか」

「はい」

「周りを囲むんだ」

他の者達に対して命じる。

「若しもの時は」

「どうするんですか？」

「簡単なことだ。コーランの一文を詠唱するんだ」

「コーランのですか」

「そう、それだけでいいから。いいな」

「はあ」

「それじゃあ」

家の中からは何も感じない。物音一つしない。スレイマーン達はそこへ近付いていく。その時不意に家の中から物音がした。

「!?!」

「何が一体」

「騒ぐことはない」

騒然としかけたところで制止した。

「中にいるのはやはり」

「やはりって」

「ジンナ!」

スレイマーンは家の中にいるであろうジンナに対して叫んだ。

「一太刀だ!それで首を斬れ!」

「はい!」

中からジンナの返事が返って来た。そして風と何か重いものを斬る音がした。

すると窓から何かが飛び出てきた。それは地面に落ちるところと転がりやがて止まったのであった。

首であった。美しい顔立ちに黒く長い髪を持つ女の首であった。

あの女のものに他ならなかった。

「あの女の」

「ジンナさん、まさか」

「待て」

殺人かと顔を青くする他の者に対してスレイマーンが言った。

「よく見るのだ、この女の首を」

「この女の首を」

「そうだ。よく見てみる」

「よくつて……ええっ!?!」

「なっ、これは!?!」

「これでわかったな」

ママーの家の者達はその首を見て皆青くなりかけた顔を蒼白にさ

せてしまった。

第六章

その首は只の首ではなかった。目は赤く爛々と輝き半開きになった口からは狼の様な牙が見えていたのである。それは明らかに人のものではなかった。

「この首は何なんですか!？」

「おそらくはな」

スレイマーンは話しはじめた。

「グーラだ」

「グーラですか、これが」

「そうだ、女の食人鬼だ」

スレイマーンは述べる。

「マムーの様子を見ておかしいと思っていたが。やはりな」

「そんな、このバグダートに魔物がいるとは」

「旦那様は一体」

「それは」

彼等に言おうとしたところで家の中から声がした。

「旦那様」

それはジンナのものであった。彼は傷だらけの身体で家から出て来た。その右手にはあの刀がある。

「女の首はそちらですか」

「おお、無事だったか」

「はい、何とか」

彼は答えた。

「けれど。危ないところでしたよ」

「一太刀で済ませたからまだよかったのだ」

スレイマーンは彼に対してまたそれを言った。

「何故ですか？」

「この女はおそらくグーラだったのだ」

「グーラですか」
「そうだ。グーラは一太刀で死ぬがな」
「はい」
「二太刀を浴びると蘇るのだ。そうなれば御前とても」
「だから何度も念を押されたのですね」
「そうだ」
スレイマーンは答えた。
「これでわかったな」
「はい」
「あの、それで」
「マムーの店の者達がスレイマーンに声をかけてきた。」
「旦那様はその」
「どうなったでしょうか」
「それはこれからだ」
「そう語るスレイマーンの顔は決して明るいものではなかった。」
「だがな」
「はい」
「彼等に対して言う。」
「何があっても驚くなよ」
「わかりました」
「それじゃあ」
「うむ。ジンナ」
「何でしょうか」
「家の中へ入るぞ。いいな」
「わかりました」
「一応コーランの一文は詠唱しよう」
「スレイマーンは他の者達に対して述べた。」
「魔物はコーランを恐れるからな」
「そうですか」
「アツラーの他に神はなし」

まずはスレイマーンが述べた。

「アッラーは偉大である」

彼等はそう言いながら家の中へ入った。そこは何もない廃墟であった。

「あれっ」

ジンナはその廃墟を見て声をあげた。

「おかしいですね」

「どうしたのだ？」

「いえ、あのですね。私が入った時は凄い立派な家だったんですよ。彼は言う。

「凄い立派な装飾が一杯あって美味しいお酒や羊の肉まであってね。それがどうして」

「グーラの幻術だったのだろうな」

スレイマーンはそれを聞いたうえで述べた。

「幻術ですか」

「そうだ。本来は只の廃墟だったのだ。ここそのままにな」

「それを魔力で見せていたってことですか」

「そういうことになるな」

「恐ろしい奴ですね」

「そうして男を誘惑して」

「とりあえずここには何も無いな」

スレイマーンはその廃墟の中を見回して述べた。

「問題は奥だ」

次に奥にある扉に目を向けた。

「あそこだ」

「あそこは寝室だったんですよ」

ジンナは述べた。

「けれど入っていないです」

「何だ、そうなのか」

「もう扉を閉めたら襲ってききましたから」

「ふむ」

「それで一太刀でやって」

「そういうことか」

「それでその奥ですけれど」

「何があると思う？」

スレイマーンはジンナに問うてきた。

「勘ですけれどね」

「ああ」

「あまりいいものじゃないでしょうね」

「そうだろうな。まあ開けてみるか」

「はい」

スレイマーンが扉に手をかける。そして他の者はそれを見守る。

程なくして扉の奥にあるものが姿を現わしたのであった。残念なことにスレイマーンの予想が当たった。

「うっ……」

皆それを見て思わず顔を顰めさせた。

「やはりな」

スレイマーンもそれは同じであった。その中を見て顔を歪めていた。

「予想通りだった」

「まさかこれ全部」

「そうだ」

そこにあつたのは死体であつた。干からびた死体や白骨だけになつた死体。様々なものがあつたがどれもまともな状態ではないという共通点があつた。

「あの女がしたことだ」

「グーラがですか」

「そういうことだ。人を食うのだからな」

「それですか」

「じゃあ旦那様も」

「多分な」

答える顔が暗くなる。

「この中にいるだろうな」

「何てことだ」

マムーの店の者達はそれを聞いて大きく嘆息した。

「旦那様が化け物にやられるなんて」

「あんな素晴らしい方だ」

「夜には危険が多いものだ」

スレイマーンは述べた。

「女であつてもな。それでマムーは」

「魔物の餌になつたつてわけですか」

「そういうことだ。しかし」

スレイマーンもまた嘆息した。

「恐ろしい話だな。このバグダートにこうして魔物がいたとは」

「ええ」

それにジンナが頷く。

「とんでもないことですよ、これって」

「だが真実だ」

彼はそれに返す。

「今ここにある屍達がな。何よりの証拠だ」

「そうですね。それにしても」

「何だ？」

「若し旦那様が気付かれなかったらどうなっていたでしょうかね、

「一体」

「そうだな」

スレイマーンはその言葉に応えて述べた。

「最悪このバグダートが魔物の街になつていたらどう」

「魔物のですか」

「少しでも油断すればな」

彼は言う。

「そうなってしまうのだ。惑わされても」

「恐ろしいことですね」

「だからこそ常にアツラーと共にあらねばならない」

これが彼の考えであった。

「全てはアツラーの下に」

「アツラーの下に」

「アツラーは偉大なり」

またその言葉が復唱された。そして犠牲になった者達を弔うのであった。

砂漠の町の遠い遠い昔話である。これは果たして本当にあったのかどうか。アラビアンナイトにはこうした魔物の話が多くあるがそれでも本当かどうかはわからない。それを確かめなければ砂漠に浮かぶこの街に行けばいいだけだ。だがそこで美女に出会ったならば御用心あれ。貴方が勇氣あるならばよし。なくて単なる色好みならば。美女に食い殺されぬよう心するべきであろうか。

グーラ 完

2006・10・29

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3108f/>

ゲーラ

2010年10月8日15時04分発行